

「進化」に興味をもちだして、かなり経つ。その間にどれだけ私の考えが進化したか定かではないが、このところ疑問が増えだして困っている。私自身がひとの誕生から死までを直接、間接に経験することで、生物の進化がますます謎めいてくるのである。

そんな謎の一つがネオテニーという現象である。祖先のこどもの形態がそのまま子孫のおとなの形態として現われる現象で、かつて日本でも有名になったウーパールーパー(メキシコ産のサンショウウオ)はその代表例である。これはえらをもつたまま成熟し、子孫を残す。人類もこのネオテニーの例と考えられている。成人の頭骨が類人猿の胎児の頭骨によく似ていることをはじめとして、ヒトの形態上の特徴は類人猿の胎児の生き写しなのである。人類は「裸のサル」というより、「裸のサルの胎児」ということになる。

発生の過程が昨今の生物学の関心の的だと聞く

西脇与作

裸のサルの胎児

が、生物学にこの現象の説明を求めても思うような答えが返ってこない。発生の時間的な機構やその発現も進化の網にかかっていることを示しているのだろうか、詳細は不明である。十九世紀後半に最先端の科学として登場した発生学は、遺伝学とその分子レベルでの研究が盛んになるにつれ、時代遅れと考えられた経緯をもっている。その直接の結果ではないにしても、今世紀の生物観は発生の過程を無視して、遺伝子と自然選択が直接に結合することからつくられている。

この遺伝子と自然選択の結合は、遺伝子による生命理解を押し進め、進化の総合説や社会生物学を生み出したばかりでなく、ひとの生命観にまで影を落としている。生体が遺伝のプログラムを実行するとはどのようなことなのか。プログラム実行の経過がわからないと、「生きざま」がブラックボックスとなってしまう。

発生の無視、それがヒトと人間の乖離を生み出すとみるのは考え過ぎなのだろうか。

(にしわきよさく・慶応義塾大学助教授―哲学)

東洋学術研究 ● 既刊

第二十八巻・第三号(通巻百十九号)

平成元年九月 発行

特集・情報化社会と宗教

【対談】情報化社会の文化と宗教

村上陽一郎
佐藤進

情報社会概念の系譜と情報化が宗教に及ぼす影響

伊藤陽一
阿部美哉

アメリカにおける情報化社会と宗教

石井研士

日本宗教の情報化の現状

石井研士

高度情報化社会における個人化と宗教

石井研士・木塚隆志

高度技術化社会の情報行動

広瀬英彦
島田裕巳

情報化社会の信仰と形態

新睦人

情報化社会の価値理念

高橋直之

〈学術随想〉世論についての断想

信原幸弘

〈研究覚え書き〉

情報食動物としての人間観について

第二十八巻・第四号(通巻百二十号)

平成元年十一月 発行

特集・特集・生と死の省察

【対談】仏教思想の生命観

梶山雄一
屋嘉比康治

生と死の価値と死の意味

坂本百大

現代医療と伝統的死生観

加藤尚武

大脳生理学から見た「生死」

三浦光彦

死生観——西と東

宮田登

日本の民俗儀礼における「死」

五十嵐一

イスラームの死生観

横山絃一

——イブン・スィナーの医学思想

趙承福

私「生」と「死」を考える

筑波常治

——唯識説の立場から——

山中弘

中国と朝鮮の道徳哲学から見た

日本の家族イデオロギー

〈学術随想〉農学史からの「科学」見直し

〈研究覚え書き〉宗教観の問い直し

末木剛博・吉村均訳

山田中